扇の的――「平家物語」から(1)

扇の的

一一八五年、義経は平家の拠点となっていた屋島を攻めた。平家は海に逃れ、海上の平家と陸上の源氏が向かい合うこととなった。日が暮れ、義経が引き上げようとすると、沖から小舟が一そうこぎ寄せた。舟の中から年若い※女房が姿を見せ、扇を竿の先に付けて舟端に立て、陸へ向かって手招きをする。扇を射よということらしい。

義経は、弓の名手と聞いた、※下野国の住人・那須与一に、扇の真ん中を射るよう命じる。与一は辞退しようとするが、義経の命令に背くことはできず、馬に乗って水ぎわに近づいた。味方のつわものどもは後ろ姿をはるかに見送って、「この若者は必ず射当てると思います。」と申し上げたので、義経も頼もしそうである。扇との間は※四十間ほどであった。

ころは二月十八日の※酉の刻ばかりのことなるに、

時は　酉の刻頃のことであるが、

をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。

折から　岸を打つ波も高かった。

舟は揺り上げ揺りすゑ漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。

舟は揺り上げられ揺り落とされ（上下に）漂うので、扇も竿の先に静止せずひらめいている。

沖には平家、舟を一面に並べて見物す。

陸には源氏、※くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも

馬のくつわを　どちらもどちらも

晴れならずといふことぞなき。与一、目をふさいで、

晴れがましくないということはない（晴れがましい様子である）。与一は目を閉じて、

「南無※八幡大菩薩、※我が国の神明、※日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。

我が故郷の神々の、　射させてください。

①これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二たび面を向かふべからず。

二度と顔を合わせるつもりはありません。

②いま一度※本国へ迎へんとおぼしめさば、この矢外させたまふな。」

いま一度（私を）本国へ迎えようとお思いになるならば、　外させないでください。

と心のうちに祈念して、目を見開いたれば、

心の中で祈り念じて、

風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなつたりける。

吹くのが弱まり、　射やすそうになっていた。

※女房…ここでは貴族や武家に仕える女性のこと。　下野国…現在の栃木県。
四十間…一間は約一・八メートル。　酉の刻…午後六時頃。
くつばみ…くつわ。馬の口にくわえさせ、手綱を付けるための金具。
八幡大菩薩…八幡神を仏教の菩薩とみたときの称号。八幡神は特に武家の崇敬を集めており、弓矢の神とされた。
我が国…ここでは与一の故郷である下野国のこと。ここから与一は下野国の神々を挙げている。
日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神…それぞれ、日光二荒山神社（日光市）、宇都宮二荒山神社（宇都宮市）、那須湯泉神社（那須町）の祭神を指す。
本国…ここでは与一の故郷である下野国のこと。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の言葉を現代仮名遣い(づか)に直し、ひらがなで答えなさい。

A にんぐわつ 〔　　〕

B あふぎ 〔　　〕

(2) 本文中の対句(ついく)の表現となるように、解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉を書きぬきなさい。

□には□□、□を一面に並べて見物す。

□には□□、□□□□を並べて

これを見る。

(3) ——線①「これを射損ずる……べからず」から読み取れる与一の様子として、適当なものを選びなさい。

ア 自らや味方の名誉(めいよ)がかかる中、必死に祈(いの)り念じている。

イ 弓矢の腕(うで)に自信があり、射当てることを確信している。

ウ 矢を射るには不利な状況(じょうきょう)で、投げやりになっている。

〔　　〕

(4) ——線②「いま一度本国へ迎へんとおぼしめさば」とあるが、この部分が表す内容となるように、(　)に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

(A)が、もう一度(B)を本国に迎えようとお思いになるならば

ア 源義経　イ 那須与一　ウ 我が国の神明

A〔　　〕 B〔　　〕

(5) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 源氏の方から平家に向かって舟を近づけた。

イ どちらを見ても、たいへん晴れがましい情景だった。

ウ 与一は屋島にある神社の神々に願をかけた。

〔　　〕